大阪インターナショナルチャーチ
ジョセフ・トッティス牧師
2014年4月27日

心の穴を埋める

今朝、最初に使徒パウロの言葉を読みましょう。

ピリピ 3:7-8 しかし、私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、

1996年のことです。私は当時26歳で、高校の教師をしていました。科目は自分の得意なコンピューター・グラフィックです。フォトショップやイラストレーター、アニメーション、3Dモデリング、ビデオ編集、シルクスクリーンなど、楽しいものがいっぱいです。
私は、好きな仕事や愛してくれる家族に恵まれていました。また夢にまで見たスポーツカーを手に入れ、私にまったく文句を言わない彼女までいました。何もかもが完璧のようでした。欲しかったものすべてを手に入れた私ですが、たったひとつ必要なものが欠けていました。でも、それが何だか見当がつかなかったのです。

それまでの私は、まるで、幸せになるにはあれを手に入れなければとか、満足するにはこの目標を達成しなければ、というささやきを常に耳にしながら生きる人生でした。もちろん、耳で聞こえる声ではありません。自分から出たとは考えられないような思いがふと頭をよぎるといった類いのものです。

たとえば、私がまだ子どもだったころ、「みんなに好かれるにはスポーツが得意でないとだめだ」というささやきが聞こえました。けれども、そのころの私はスポーツが苦手でした。毎年、私は少年野球のチームに入りたいと言いますが、母が「本当に少年野球に入りたいの」と尋ねます。運動が苦手なことを母は知っていて、他の子たちにからかわれると思ったからです。私の足は体の大きさには不釣り合いに大きくて、うまく動かすことができなかったのです。けれども、やがて体は足の大きさに釣り合うよう育ちました。また、兄からいつも暴力をふるわれていたのですが、自分の身を守ったり速く逃げようと毎日しているうちに、私はとても強い子になりました。気づけば、高校のレスリング部とフットボール部のキャプテンになっていました。こうして私は人気者になり、信じてもらえないかもしれませんが、クラスのイケメン第一位にも選ばれました。

こんなにいろんなことが起こっても、私は以前よりももっとむなしく感じていました。何か大きな期待をかけて、実際手にしてみると期待外れだったという経験をしたことがありますか。当時の私はまさにそれでした。人気や栄誉がいつまでも継続する充足感を与えてくれることはありませんでした。むしろ、「次は何をすればいいんだ」という思いになるだけでした。

こうしてふたたび、頭の中でささやきが聞こえました。「大学に行って、成功者にならなければだめだ。」

私の母はシングルマザーで、あまり経済的に頼ることはできませんでした。母は、大学在学中は実家にただで住んでいいと言いました。けれども、進学しないなら仕事を見つけて家にお金を入れなさいと言われました。とは言え、母に授業料を払ってもらえないので、私はどちらにしろ稼ぐ必要がありました。結局、私は3つの仕事をして8年かかってやっと大学を卒業しました。でも、その価値は十分ありました。そのおかげで、高校教師になれたからです。それはそれですばらしかったのですが、私の中のむなしさはかわりませんでした。

こうすれば幸せになれるというささやきに私は従いましたが、何を達成しても、その約束は実現しないことを思い知らされました。私の人生の空洞が埋められることはなかったのです。欲しかったものすべてを手に入れても、たったひとつ必要なものが欠けていました。それは何なのでしょう。次は何をすればよいのでしょう。ずっと求め続けてきた幸福感や充足感をもたらしてくれるものは何なのでしょう。何を追い求めればよいのでしょう。

ある金曜日の夜、クラブに行った時のことを今も覚えています。私に一切文句を言わない彼女を連れておしゃれな服を着て、夢にまで見たスポーツカーで出かけました。当時の私には筋肉も髪の毛もありました。人生がうまくいっているかと誰かに尋ねられたら、おそらく、「すべてうまくいっているよ。これ以

上望むものはない」と答えたでしょう。けれども、それ以上望むものがなかったのは、何を望めばよいかわかっていなかったからです。

その金曜日の夜、そのクラブにいた人たちを眺めていたのを覚えています。カップルが楽しそうに踊っていました。けれども、映画かテレビ番組の場面展開のように、そのふたりの誰も知らない本当の姿が見えたような気がしました。喧嘩ばかりしてまったく幸せそうではありません。また場面が目の前で踊っているふたりに戻りましたが、一夜だけでも自分たちの不幸を忘れようと酔っぱらって踊っているようでした。

また別のカップルも、嫌いな仕事をしなければならず、みじめな毎日を過ごしているようでした。他の人も、ストレスを抱えている人、孤独な人など、そこにいた人はみな、楽しそうにふるまっていましたが、本当に幸せなら、そんなところに来て酔っぱらったり踊ったりする必要があるでしょうか。その場を見渡していると、私の目の前に立っている男性に気づきました。にっこりと笑顔で、おしゃれな服を着て、きれいな女性を連れていました。体つきもよく、すてきな髪型でした。すべてが望みどおりと思しきこの男性が、この場所で一番不幸な人だということに私は気づきました。どうしてそうわかったのでしょう。それは、鏡の中の自分だったからです。こうして再び、「次は何をすればいいんだ」と思いました。

今度は、「ヨットを買わなければ」というささやきが聞こえました。「ヨット？」と疑問に思いました。ヨットを買ってどうするのだろう、泳げもしないのに、と思いました。その声は続けて言いました。「じゃあ、豪邸はどうだろう。」私は、今住んでいる小さな家でもさびしいのに、と思いました。するとその声は「結婚して子どもをたくさん作ればいい」と言いました。私は頭がおかしくなってきたと思いました。当時の私は、結婚などまったく望んでいなかったからです。

エイミーの出産予定日が一カ月後に迫っている今、私はわくわくしています。けれども、正直なところ不安もあります。赤ちゃんをどう扱っていいかまったくわからないからです。先週、父親教室で赤ちゃんのだっ子のしかたを教わりました。首を支えなさいと教えられましたが、首を支えないと頭が落ちてしまうのかと思うと本当に怖いです。今までずっと赤ちゃんは苦手でした。甥や姪が生まれたときでさえ、歩きだすまで抱っこしませんでした。本当に、どう扱っていいのかわからないのです。おむつの換え方や沐浴のしかたも教わりました。今まで一度もそんなことはしたことがありません。ですから、26歳だった私に「子どもをたくさん作ればいい」などというささやきが聞こえてきたら、あり得ないと思うのは想像がつくでしょう。

こうして始めて、ささやきに従うのをやめました。ヨットや豪邸を買うこともせず、当時の彼女にプロポーズもしませんでした。主に感謝です。結婚していたら、エイミーに出会えなかったでしょう。独身の皆さん、私の言うことを信じてください。独身でいるよりもっと不幸なことがあります。間違った相手と結婚するほうがはるかに不幸です。神の備えてくださった最善というものがあります。それ以下で妥協しないでください。

クラブの話に戻ります。それまでの私は、「これをしなければならない」というささやきが聞こえるたびに、わかったと答えてそれを手に入れようと頑張りました。けれども、このときは違いました。その声を信じなかったのです。その夜、次は何をすればよいのだろうと考えながら家路に着きました。

翌日、大学時代の友人から電話がありました。その友人は、月に一度くらい電話をしてきて、パソコン関係の質問をしてきます。そして電話を切る前に必ず、今週末教会に行かないかと誘ってくるのです。それはすでに2年くらい続いていました。その日もいつもどおり話していましたが、最後にきっと誘ってくるだろうと予測していました。それまでの2年間、週末に教会に行けない理由をいつも取り繕っていましたが、このときは違いました。もう言い訳できませんでした。前日は夜通し、自分の進むべき道が見えず、途方に暮れていたのです。私は思いました。「いろんなことを試したけど、うまくいかなかった。教会に行ったからといって、失うものは何もない。」こうして電話を切る前に友人がいつものように尋ねてきました。「明日何してるんだい。一緒に教会に行かないか。」私は、「うん、いいよ」と答えました。友人は、「うそだろ。2年間も断ってきたのに、本気かい？」と言いました。私は答えました。「本気だよ。でもあんまり疑われると、気が変わるかもしれないな。」友人は信じられないといった様子でした。私自身、信じられませんでした。

そして次の日、私たちは一緒に教会に行きました。何曲か賛美した後、牧師が説教を始めました。そこでの話は一生忘れません。牧師は会衆に向かってこう語りました。「皆さんの中には、心に虚しさを感じている人がいるでしょう。そして、恋愛や出世、物を手に入れることでその虚しさを埋めようとしたけれど、うまくいかなかったのではないでしょうか。むしろ、虚しさが増すだけだと感じているのではありませんか。」私は心の中で、「どうしてこの人は私の心の内がここまでよくわかるのだろう」と思いました。牧師は続けました。「世の始まりに、アダムとエバはエデンの園にいました。園にいたころ、ふたりには体と心がありました。そして、神の霊がともにありました。けれども、ふたりが罪を犯して園から追放されると、体と心は残りましたが、神の霊を失ってしまいました。今現在の私たちも同じです。私たちには体と心はありますが、人生に神の霊が欠けているのです。私たちの心には、神の形をした空洞があります。それを埋めることができるのは、神の霊だけです。他のものではぴったりとはまらないのです。私たちの人生の虚しさを埋めて満足させてくれるものは他にありません。」その日、そこには1,000人ほどの人がいましたが、まるで牧師が私に直接語りかけているように感じました。

礼拝後、また来たいかと友人に尋ねられ、「うん」と答えました。友人が、平日に会って聖書を一緒に学ばないかと誘ってくれたので、私はそうすることにしました。友人と聖書の学びをはじめて二週間ほど経つと、イエスの受難についての学びがありました。医学的見地から、イエスの苦しみがどのようなものであったかを説明するプリントをもらいました。鞭で打たれ十字架に架けられた様子が詳細にわたって書かれていました。その6ヶ月ほど前、私は姪の高校で開かれたミュージカルを見に行きました。「ジーザス・クライスト・スーパースター」というミュージカルです。聞いたことがある人もおられると思いますが、「ジーザス・クライスト・スーパースター、あなたは噂どおりのお方ですか」という歌詞があります。そのミュージカルの中で、ピラトの命令でイエスが39回鞭で打たれるシーンがあります。その場面で流れていた曲は、「鞭1回、鞭2回、鞭3回、･･･」と39回まで数えるというものでした。聖書の学びを終えて家に帰ろうと運転していた私の頭の中で、6ヶ月も前に聞いたその歌がぐるぐる回っていました。そして、レコード店が目に入り、すぐに車を止めて店に入りました。ジーザス・クライスト・スーパースターのCDがあるか尋ねると、店員がCDのボックスセットを手渡してくれました。私はそれを買って、家に向かって車を走らせながら、頭の中に回っていた曲を探しました。そしてついに見つけました。「鞭1回、鞭2回、鞭3回、･･･」鞭の回数が増えるたびに、緊張が高まりました。39回までたどり着く頃には、その鞭で打たれるべきだったのは自分だということを悟りました。なんともったいないことでしょう。罪のないイエスのいのちと引き換えに、私のような罪のあるいのちを救ってくださったのです。イエスは、私という人間のために鞭打たれ、自ら十字架にかかってくださったのです。この現実に私はやっとたどり着きました。39回鞭が打たれるのを聞きながら、主の御前に打ちひしがれ、ただ泣くばかりの自分がいました。私は神に赦しを乞い、イエス・キリストに人生をささげました。

ローマ 10:13 「主の御名を呼び求める者は、だれでも救われる」のです。

私は失われた者でしたが、見出されました。私は盲目でしたが、見えるようになりました。私は有罪でしたが、赦されました。私は縛られていましたが、自由にされました。私は空っぽでしたが、生まれて初めて心が満たされたのです。その夜、2007年5月25日、私はクリスチャンになり、今も満たされ続けています。

アメリカで育った私は、小さいころからイエスについて聞いたことはありましたが、このお方を知りませんでした。それまでずっと、主の御声ではなく、幸せになるためにはこれをしなければならない、というサタンのささやきに耳を傾けてきました。ここにいる皆さんの中にも、そのようなささやきに耳を貸してきた人がいるのではないでしょうか。幸せになるためには、イエス・キリスト以外の誰かや何かが必要だとささやく声です。どうか、そんな嘘を信じないでください。私は風を追い求めて人生を26年も無駄にしました。皆さんはどうか、一日も無駄にしないでください。

三千年前、すべてを手にした王ソロモンがいました。富や名声、知性、女性、権力などすべてです。それでも、彼はすべてがむなしいく人生は無意味だと感じました。彼はこのように語りました。

伝道者の書 1:14 私は、日の下で行われたすべてのわざを見たが、なんと、すべてがむなしいことよ。風を追うようなものだ。

日の下で行われたすべて、富や名声、知性、女性、権力はすべてむなしいと言うのです。彼は、神に目を向けて天の視点を得て初めて、生きる目的や意義をふたたび見出しました。ソロモンはこの書を次のように締めくくっています。

伝道者の書 **12:13-14** 結局のところ、もうすべてが聞かされていることだ。神を恐れよ。神の命令を守れ。これが人間にとってすべてである。
14 神は、善であれ悪であれ、すべての隠れたことについて、すべてのわざをさばかれるからだ。

四角の杭が丸い穴には収まらないように、私たちの心にある「神の形をした空洞」は神以外の何ものによっても満たされません。「これができたら幸せになれるのに」とか「あれを手に入れれば満足できるのに」と思う人は常にいます。私もそのひとりでした。皆さんはどうでしょう。それぞれが自分に問いかけなければなりません。人生で目指すもの、望むものは何だろう。幸せや充実をもたらすと私たちが考える者は何だろう、と。それが何であろうと、「また必ず渇く」とその上に但し書きを足してください。イエスはサマリアの女にこうおっしゃいました。

ヨハネ 4:13b この水を飲む者はだれでも、また渇きます。

私たちが渇望するものは何でしょう。私たちの渇きをいやしてくれるのは何だと思っているのでしょう。それが何であろうと、また必ず渇きます。

ヨハネ 4:14 しかし、わたしが与える水を飲む者はだれでも、決して渇くことがありません。わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠のいのちへの水がわき出ます。

イエスは、わたしが生ける水だとはおっしゃいませんでした。イエスが生ける水を与えるとおっしゃいました。そして、その女がそれを受け取るなら、ふたたび渇くことはないと言われました。生ける水が実際何を意味しているのかそこには書いてありません。それを知るためには、他の個所を見る必要があります。この個所では、イエスは神殿で礼拝に来ていた群衆に囲まれていました。

ヨハネ 7:37-39 さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。「だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。
38 わたしを信じる者は、聖書が言っているとおりに、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる。」
39 これは、イエスを信じる者が後になってから受ける御霊のことを言われたのである。イエスはまだ栄光を受けておられなかったので、御霊はまだ注がれていなかったからである。

ここでイエスは、聖霊を生ける水と呼んでおられます。主の御名を呼び求めると、聖霊が私たちの心に入って来られ、神の愛と赦しに満たされます。それだけでなく、愛と赦しが満ち溢れます。ということは、私たちの周囲の人はそのしぶきがかかるということです。

皆さんは子どものとき、水のかけあいっこをして遊んだことがありますか。水鉄砲とか水風船、またはホースを使ったでしょうか。その目標は何でしょう。何をしようとしているのでしょうか。他の人をびしょぬれにさせることです。キリスト教も同じことだと言えます。私たちの心から聖霊に溢れていただき、周囲の人々に浸透してもらうようにするのです。その水はどんなものでしょう。使徒パウロはこう言いました。

ガラテヤ 5:22-23a しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

今日そして毎日聖霊に満たされ、水のかけあいっこを始めましょう。神は、私たちの心のむなしさにご自身の愛をあふれさせようと望んでおられます。ですから、その愛のしぶきを互いにかけあうにはどうすればよいか考えましょう。誰かに水をかけてもらうのを待っていてはいけません。長い間待つことになるかもしれないからです。むしろ、まず自分から水をかけたらどうなるでしょう。みんなが水をかけ始めます。そうして気がつけば、みんなずぶ濡れになります。誰かに水をかけたら、必ずいつか自分も水をかけてもらえます。愛情を注げば、愛情を受けます。「因果応報」だからです。イエスはおっしゃいました。

ヨハネ 13:35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

一日も無駄にしないでください。今日、神の愛で心を満たされてください。これですべてです。
祈りましょう。